

## これからの子ども達

—小児科医として 50 年—

顧問 香川県 にしかわクリニック 西川 清

### ・世界情勢と子どもたち

コロナ禍が続く中、ウクライナではロシアによる時代錯誤の残虐な侵略戦争が続いている。民間人、子どもたちも容赦なく殺されている。一方では独裁国家、あるいはそれに近い国が次々と現れ、人権が、自由が、安寧が失われつつある。人間は様々な経験を積み、賢くなって、次第に理想の世界に向かって、平和的に共存共栄していくと思ったのは幻影か、何時の頃からか、今世界中がジワリと逆戻りしている感がある。自国主義がはびこると同じように、人々も自身の生活のみを守るようになれば、弱者に寄り添う心情、行動までもが先細りする。そんな中で子ども達、とりわけ病弱の子らに寄り添い、活動を続けていくには増々の困難が広がりつつあるように思われる。

### ・病弱研の名ばかり理事として

病弱教育に携わったのは、喘息児が 120 人も入院していた香川小児病院に、小児喘息アレルギー医として赴任した 48 年前からで、それまでは、病気は薬や注射や手術で治すものとしか考えていなかった。ところが主治医となった入院児が、病棟から養護学校に通学し、宿題をし、母恋しさに泣き、喧嘩をしたり、運動会、学芸会、演劇などに取り組み、喜怒哀楽する病児たちに触れ、当たり前のことながら入院児の人生がそこにあることを痛感し、病気の治療同様に、生活面での子どもの安寧や成長を願うようになり、さまざまな行事を通じて成長し育っていく様子を応援してきた。当時の喘息長期入院期間は平均 4 年、最長 11 年もの長きにわたることもあり、自身病院内の官舎に住み、朝夕子どもたちと接して、ドクター半分、残りは親代わり、あるいは半端な教師のような生活をしたのが 25 年の勤務医時代だった。20 数年前に丸亀で全病研を開催した後から、顧問を仰せつかりその後名ばかりのまったく活動しないまま無為の時間をむさぼってきたことを本当に申し訳なく思う。現在は養護学校も支援学校と名を変え、通う病弱児の種別も昔とは大いに変化し、心臓、腎臓、喘息疾患などの入院児を中心とした構成から、肢体不自由児、発達障害の子どもが多いと聞く。教師の先生方のスキルも昔とは全く異なるものとなっていることだろう。

### ・街の小児科医として

喘息の治療法が進歩し、対症療法から定期予防吸入療法中心になると、発作はほとんど起きなくなり、あっという間に喘息入院児は病院からいなくなり、その後は巷の小児科医として、また違った子どもたちを診てきた。毎日の診療として乳児健診、予防注射、アトピー性皮膚炎、気管支ぜんそくなどの慢性疾患の子どもを診ながら、地元の小児科医として、校医、障害福祉サービス事業所「善通寺希望の家」の評議員、理事、要保護児童対策協議会（虐待など）の議長として、数々の案件に携わってきた。虐待の案件は 3 万市民にして 60-90 件である。その一件一件の子どもたちを思う時、非力で訴える力もなく、逃れるすべも持たず、それでも懸命に生きようとする子どもの姿が想像され、痛ましいと同時に涙が出るほどいとおしいがなすすべもなく非力さを痛感する。そんな体験をしながら、あっという間に、早や半世紀というとても長く長い時間を小児科医として過ごしてきた。ここいらで一度総括を入れるべき時に巻頭言のお話を頂いた。

### ・小児科医は何をしてきたのか

医学の発達には本当に目まぐるしく顕著で、診断から、治療まで、この 50 年は原始時代から一気に

現代の IT 時代まで駆け抜けたという実感がある。診断も治療もまるで容易に可能となった。そんな中でも小児科は手まめに、出産から始まり、乳児健診、多くの予防接種、喘息アトピーなどの慢性疾患なら多いときには月一度は子どもとその親と接し、会話し、さまざまな指示をして成長を見守ってきた。その回数やもう膨大である。そのおかげで病気は快方に向かうが、人生に踏み出す確固たる意識を芽生えさせることは出来たのか。

50 年を迎え、個人としても、日本全体の小児科の在り方としても、後悔の念がある。成長過程で起こりうる様々な問題を解決する、あるいは未然に防ぐ、あるいはまったく問題が起きないような、あるいは日本人として立派に生きてゆけるようにする、そんな子育てシステムが構築できる医療、子育て体系は誰も考えてこなかった。虐待死のニュースが流れ、園児の送迎バス取り残し死亡事故のニュースに胸をえぐられる。何か子どもの事案があると、いろいろな境遇の中で、なすすべもない。今の世に限りなく存在するいじめ、不登校の子どもたち、ゲームにのめり込んでいく子たち、自然の中で遊ぶすべを知らない子どもたち、貧困の子ども達、ヤングケアラー等々。そんな子たちを生み出してきた社会に対して子どもを何十回も見てきた小児科医たちは全くの無力である。意見を言う意識も芽生えない。まるで私たちには関係ないと言わんばかりである。

#### ・これからの子ども達

この子どもたちにみられる様々な現象について解説するのは簡単である。しかしその解決となると、どのケースもそれぞれの問題が複雑でその対応は困難を極める。この複雑難解なパズルを、親や、教師や、指導員にのみ押しつけ、まだその上に、外から何やってるんだとばかり、さまざまな批判を投げつけるメディアや評論家たちや一部の医療関係者たち。

戦争やコロナ禍がまだまだ続く中、これから始まる経済不況や少子高齢化、非正規労働者、低賃金、未婚率上昇、出生率の低下、さまざまな困難の中での子たちの成長は想像するだに、気が重い。最近のニュースの中で、部活の民間移行という話も気になる。ホッとしたのが、子どもたちに好きなテーマを選ばせて、それを、時間をかけて仕上げさせるという子どもたちが生き生きした授業があった。困難の中で、自身で生きていけるスキルを付けさせる以外に方法はないのだろうか。

#### ・これからの病弱教育

様々なシステムができ、発達障害でも細かい分類がされてその教育方針もかなり確立させつつあるやに聞いている。先生方も我々医療者同様、診断と治療のレベルも多いに上がっているものと喜ばしく思う。それは喜ばしいことではあるが、我々小児科が陥ってきた、病気をみて人を見ない轍は踏むことはないと信じている。そして診ていてもう一つ気がかりなことは、成長による、教育機関からの卒業後のこと、それから保護者の高齢化である。これらはもう政治の保護を待つしかないのかもしれない。